

悠久録

大関松三郎

長岡の生んだ少年詩人大関松三郎の生家を訪ねた。松三郎は 1926 年 9 月 7 日長岡市下々条の小作農大関仁平次・イシとの間に生まれた。兄弟姉妹は 10 人、その 3 番目である。黒条尋常小学校（現黒条小学校）在学中に生活綴り方運動に参加していた寒川道夫（1910～77）と出会い、その感化で詩の才能を伸ばす

小学校卒業後鉄道教習所に入り、機関助手として勤務するが、軍属を志して山口県防府の海軍通信学校に入学する。そしてマニラ通信隊に赴任途中の 1944 年 12 月 19 日、南シナ海で魚雷攻撃を受けて乗船が沈没、戦死した。わずか 18 歳の短い一生だった

寒川は生活綴り方運動事件で検挙され 2 年間服役する。刑期を終えて出所した時には、大関はすでにこの世にいなかった。51 年、寒川は松三郎の残した詩を集めて詩集『山芋』を出版する。同著に松三郎の 23 篇の詩が載っている

寒川の存在なしには松三郎の詩はなかった。寒川は松三郎の心深く眠っていた鉱石を掘り出さしたのである。その作品を寒川の代表作とする論もあるが、寒川は松三郎の詩心に火をつけた。その詩を磨き、宝石の輝きを与えた

それにしても自分たちの周りを見つめ、それを綴り方に書かせようとする生活綴り方運動がなぜ法によって処罰されなければならなかったのか。戦前の治安維持法の大きな危険性を、今一度顧みることが必要ではないか

今下々条三丁目の大関家の入り口には松三郎の碑と寒川の碑が 2 基並んで立っている。家は松三郎の弟秋一氏（86）が後を継いでいる。

（ひこぜん）